

原著論文

It is past time ... の補文形式は意味と関係するか？

桑名 保智*

【要 旨】

「…すべき時である」を意味する英語の表現として、It is time 構文と呼ばれる構文 (例: It's time for me to leave.) が存在する。この構文は、time の直前に high などの語が生起することもある。また、後続する補文として to 不定詞と that 節の2種類が生起可能である。以上についての先行研究は非常に多いものの、time の直前に past が生起した文 (PAST 構文) については十分調査されているとは言いがたい。It is time 構文の補文の選択は time の直前に生起する語の意味や文全体の意味などに関係することが奥田 (1998) に指摘されている。そのような関係が実際に存在するとしたら、PAST 構文においても同様の補文選択と文の意味との関係があるのだろうかという疑問が生じる。本稿はコーパス調査およびインフォーマント調査をすることにより、その問いに答えることを目的とする。調査の結果、PAST 構文では補文の選択と文全体の意味との関係は存在しないと考えられること、および文全体の意味は time の直前に生起する語の意味に帰せられることを論じる[†]。

キーワード It is time 構文, to 不定詞, that 節, コーパス調査, インフォーマント調査

1. はじめに

「…すべき時である」を意味する表現には以下の (1) が示すように It's time for ... to do や It's time (that) ... といった表現 (It is time 構文) がある。

(1) It's time for me to leave. = It's (high) time (that) I was leaving. (G⁶, s.v. time)

周知の通り、It is time 構文は、time の直前に語が生起しない場合 (TIME 構文) と time の直前に about, high, just, now のような語が生起する場合 (ABOUT 構文、HIGH 構文、JUST 構文、NOW 構文) もある。これらの構文間関係を以下の表 1 に示す。

*旭川医科大学 一般教育 英語

[†] 本稿は英語語法文法学会第 27 回大会 (2019 年 10 月 19 日、北九州市立大学北方キャンパス) にて「It is past time ... の形式と意味」というタイトルで発表した内容を大幅に加筆、修正したものである。有益なご意見とご指摘を頂いた八木克正氏、柏野健次氏、西田光一氏、野村忠央氏、有光奈美氏、および 2 名の匿名の査読者の方に心から感謝の意を表したい。また、同僚である David Fairweather 氏 (カナダ出身) にはインフォーマントとして多大なご協力をいただいた。御礼申し上げる。本稿における不備は全て筆者の責任によるものである。

表1 It is time 構文とその下位分類

	time の直前に生起する語	構文
It is time 構文	なし	TIME 構文
	あり	ABOUT 構文
		HIGH 構文
		JUST 構文
		NOW 構文

It is time 構文に関する先行研究は非常に多く、補文として生起する to 不定詞及び that 節の頻度についての研究 (渡辺 (編) 1995, 奥田 1998, 奥田 2013, 深谷 2000, 寺山 2024)、補文のタイプと意味との関係についての研究 (渡辺 (編) 1976, 奥田 1998, 奥田 2013, 安藤 2005, 内田 (編) 2009, Swan 2016, 寺山 2024)、補文の that 節内の動詞の形式についての研究 (石橋 (編) 1966, 松本・松本 1976, 渡辺 (編) 1983, 江川 1991, 八木 1996, 鷹家・林 2004, Huddleston & Pullum 2002, 久保田 2008, 柏野 2010, 原川 2016, 寺山 2024)、It is time 構文の語用論的特徴についての研究 (大竹 1999) など枚挙にいとまがない。しかし、It is time 構文に形式的にも意味的にも類似する (2) で見られる表現は従前では注目されてこなかったように思われる¹。

(2) It is past time to find a more eco-friendly means of transportation.

(COCA: FIC 2019)

(2) の it is past time … は、It is time 構文と形式的に類似している。また、意味的にも「もっと環境に優しい交通手段を見つけるべき時である」と解釈できると思われる。このことから It is time 構文の一種であると仮定し、本稿では (2) のような形式的及び意味的特質を持つ構文を PAST 構文と呼ぶこととする。PAST 構文を表 1 に加えると以下の表 2 のようになる。

表2 It is time 構文とその下位分類 (PAST 構文を追加)

	time の直前に生起する語	構文
It is time 構文	なし	TIME 構文
	あり	ABOUT 構文
		HIGH 構文
		JUST 構文
		NOW 構文
		<u>PAST 構文</u>

PAST 構文に関して、以下の (3) (筆者による作例) に関して次の判断をする英語母語話者もいる²。1 つは、(3a) と比較すると頻度は低いものの (3b) のように time に定冠詞が付されうることから past の品詞は前置詞

¹ 寺山 (2024) は PAST 構文に言及しているが、筆者が 2019 年に本稿の基礎となる口頭発表を行った時点では、PAST 構文を調査している先行研究は見られなかった。

² ここでの判断はオンラインフォーラム (The Grammar Exchange; <https://thegrammarexchange.infopop.cc/topics>) で得られた回答である。同フォーラムは 2024 年 11 月 5 日現在、閉鎖されている。なお、オンラインフォーラムで得られたデータを使用している研究には明日 (2017) がある。

であるとする判断である。もう1つは (3c) が示すように、**It is time** 構文とは異なり、**PAST** 構文では補文として **that** 節が生起すると容認不可能であるとする判断である。

- (3) a. It is past time to update your resume.
 b. It is past the time to update your resume.
 c. *It is past time that you updated your resume.

しかし、言語資料を観察すると、**PAST** 構文の補文として **that** 節が生起している例も少なくない（以下 3.1 を参照）。このことから、**PAST** 構文の形式的特徴に関する記述が求められる。また、2 節で概観するように、**It is time** 構文における補文の形式が文全体の意味と関連する可能性があることが先行研究に指摘されている。**PAST** 構文においてその関連が見られるか疑問が生じる。

本稿の目的は、以上の観点から **PAST** 構文に関する記述を行うことであり、以下について主張する。コーパス調査およびインフォーマント調査の結果から、**PAST** 構文（または **It is time** 構文全般）において補文のタイプが文全体の意味と関係するとは言えないこと、および文全体の意味は **time** の直前に生起する語の意味に帰せられることを明らかにする。

構成は次の通りである。2 節では **PAST** 構文に関連する先行研究として奥田 (1998) を概観する。3 節と 4 節では **PAST** 構文の補文形式および文全体の意味に関するデータを観察する。5 節は結論である。

2. 先行研究

本稿の **PAST** 構文の調査に最も関連する先行研究として、奥田 (1998) による **It is time** 構文についての調査を挙げることができる。奥田 (1998) は、1996 年度の *Los Angeles Times* に出現した **It is time** 構文を調査し、2 つの補文のタイプ (**to** 不定詞と **that** 節)、および **that** 節内の動詞の形式の頻度を計測した³。この節では奥田 (1998) の調査結果を概観する。

2.1. 補文のタイプの頻度

表3は、**It is time** 構文の補文のタイプの頻度についての奥田 (1998) による調査結果である⁴。**TIME** 構文では、合計 1,518 の用例のうち **to** 不定詞の頻度が 90% を超えている。一方、**ABOUT** 構文及び **HIGH** 構文は **that** 節の頻度が約 70% である。

表3 **It is time** 構文の補文のタイプの頻度 (奥田 (1998) に基づき作成)

構文	合計	to 不定詞	that 節
TIME	1,518	1,387 (91.4%)	131 (8.6%)
ABOUT	84	19 (22.6%)	65 (77.4%)
HIGH	30	9 (30.0%)	21 (70.0%)
JUST	14	13 (92.9%)	1 (7.1%)
NOW	17	16 (94.1%)	1 (5.9%)

³ 以下では、「**to** 不定詞」はその主語を表す **for** 句が顕在的な例も含んでいる。また、「**that** 節」は **that** が非顕在的な例も含んでいる。

⁴ 以下の表3, 4, 6, 7におけるそれぞれの構文の合計の数は、主節の動詞が現在時制の文の数と過去時制の文の数を足したものである。

この表について、奥田 (1998: 43) は次のように述べている。

- (4) 以上の表を見る限り、time の前にどの語がつくかということと、後の形式の間に何らかの相関関係があるようである。まず It's time... であるが、for ... to do が多いが、that 節の方も使われ、2 対 1 の割合である。次に、now や just がつくと、to 不定詞の形式が主体で、that 節が使われることはまれである。ところが about では両形式が使われるが、that 節の方が多く、また、high がつく場合も両形式が使われるが、節の形式の方が多い。

この観察についての問題点は以下の 2.4. で指摘する。

2.2. that 節内の動詞の形式の頻度

表 4 は、It is time 構文における that 節内の動詞の形式の頻度についての奥田 (1998) による調査結果である。TIME 構文、ABOUT 構文、および HIGH 構文において最も一般的な形は過去形であるということが示されている⁵。

表 4 It is time 構文の that 節内の動詞の形式の頻度 (奥田 (1998) に基づき作成)⁶

構文	合計	原形	直説法	過去形	原・直	原・過
TIME	130	14 (10.8%)	12 (9.2%)	63 (48.5%)	41 (31.5%)	0 (0%)
ABOUT	65	1 (1.5%)	11 (16.9%)	44 (67.7%)	9 (13.8%)	0 (0%)
HIGH	21	3 (14.3%)	3 (14.3%)	11 (52.4%)	3 (14.3%)	1 (4.8%)
JUST	1	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (100%)	0 (0%)
NOW	1	0 (0%)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

2.3. It is time 構文の意味

最後に、奥田 (1998) が提案する It is time 構文の意味に関する原則について概観する。奥田 (1998) は Alexander (1988) などに従って、It is time 構文には次の 2 つの意味があると考え⁷。1 つは「…するときにまさにやってきた」という意味である。もう 1 つは「そろそろ…する (すべき) ときだ」という緊急やいらだちを含意する意味である。以下では簡潔さのために、「…するときにまさにやってきた」を「時の到来」、「そろそろ…する (すべき) ときだ」を「緊急」と呼ぶことにする。いずれの意味になるかについては 3 つの複合的要因があるとしている。その 3 つとは、補文のタイプ、that 節内の動詞の形式、そして time の直前に生起する語の意味である。

1 つ目の補文のタイプと文の意味との関係については、補文が to 不定詞であれば「時の到来」になり、that 節であれば「緊急」になる傾向があると指摘する。

2 つ目の that 節内の動詞の形式と文の意味との関係については、過去形であれば「緊急」の意味になるという⁸。動詞の原形であれば「…したほうがいい」という意味と「時の到来」の意味になり、直説法なら「時の到来」の意味になる。

⁵ ここでの「過去形」が法的には直説法か仮定法かについて奥田 (1998) は言及していない。本稿は奥田 (1998) の表記に準拠することとする。

⁶ 表 3 で TIME 構文の that 節の生起頻度が 131 である一方、表 4 で同構文の生起頻度が 130 であるのは原文のままである。また、表 4 における「原・直」と「原・過」はそれぞれ、動詞の形式が原形か直説法か、原形か過去形かが判断できないケースを意味する。それらの例を以下の (i) に挙げる。

(i) a. I think it's time we **rethink** the labels ... [原・直]

b. It's high time someone **cut** Robert Hilburn ... [原・過]

(奥田 1998: 45)

⁷ 奥田 (1998) が言及している Alexander (1988) の記述を具体的に引用するのが望ましいこと、および Alexander (1988) と同種の記述をしている先行研究が存在することについて、匿名の査読者の方に指摘を受けた。感謝申し上げます。以下に、それらの先行研究の記述および考察すべき点を2つ挙げる。

Alexander (1988: 226) は以下の例を提示し、It is time 構文に to 不定詞および that 節が後続した場合の意味の対比を説明している。

(i) a. We've enjoyed the evening, but it's time (for us) to go.

(i.e. the time has now arrived for us to go)

b. We've enjoyed the evening, but it's time we went.

(i.e. we should probably have left before this)

(ia) の “the time has now arrived for us to go” が奥田 (1998) の言う「…するときにまさにやってきた」に対応し、“we should probably have left before this” が「そろそろ…する（すべき）ときだ」に対応するものと思われる。

Thomson & Martinet (1986: 254) も Alexander (1988) と同様の記述をしている。

(ii) There is a slight difference in meaning between the forms.

it is time + infinitive merely states that the correct time has arrived;

it is time + subject + past subjunctive implied that it is a little late.

Declerck (1991:359) も同様の記述をしている。

(iii) a. She's a grown woman now. It's time for her to marry.

b. It is time we should do something about it.

c. It is time we stopped poisoning our environment.

Declerck (1991) によると、(iiic) のように It is time 構文に後続する that 節の動詞が過去形の場合は以下を意味すると述べている。

(iv) Again, the implication is that of unreality: It's time you changed your attitude implies that the subclause situation has not yet actualized. In consequence, we will use a modal past if we want to suggest that the action should already have been performed, that it has been delayed too long.

また、(iiia-b) のように It is time 構文に後続するのが to 不定詞の場合、および後続するのが that 節でその節内の動詞句に should が生起する場合は以下を意味すると述べる。

(v) If we don't want to suggest this, we use either an infinitive or construction with *should*: …

ここの “suggest this” は “suggest that the action should already have been performed, that it has been delayed too long” を示している。つまり、that 節内の動詞句に should が生起する場合、その that 節は to 不定詞が後続する場合と意味的に同じものとして Declerck (1991) は分析している。

以上の Alexander (1988), Thomson & Martinet (1986), および Declerck (1991) に関して、次の2つに注意したい。1つ目は、方言についてである。Alexander (1988) はアメリカ英語にもイギリス英語にも言及しているが、著者自身はイギリス人である。Thomson & Martinet (1986) は主にイギリス英語を扱っているように思われ、著者の2人ともイギリス人である。Declerck (1991) は Preface において、分析対象とする方言を標準的なイギリス英語とすると述べている。このように、これら3つの先行研究ではイギリス英語を中心に記述している可能性がある。2つ目は、これらの先行研究は1980年代から1990年代に行われたものであり、30年以上も前のものである。

以上より、先行研究が行われていた当時の英語と現在実際に使われている英語には乖離がある可能性も考えられることから、方言差にも留意しながら現在の実態を調査し記述することは意義があると考え (cf. 八木 (2021: v))。

⁸ ここでの「過去形」は「仮定法過去」のことだと思われる。「過去形」が「動詞の原形」および「直接法」と比較されているためである。

3つ目の **time** の直前に生起する語の意味と文の意味との関係については、以下の図1によって示されている。

図1 **time** の直前に生起する語の意味と文の意味との関係 (奥田 1998: 43)

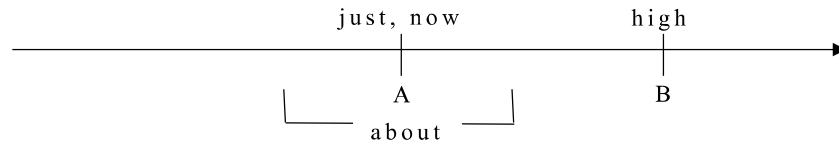


図1について奥田は次のように説明している。

- (5) 時間軸を横に取り、左から右に時間は流れている。Aは何かをする（または、しなければならない）時点を示している。**just** や **now** はこのAの時点を表すときに使われる。**about** はこのAの時点の前後までも含むことができる。一方 **high** の方は、*COD*⁹ が **high time** を *a time that is late or overdue* と定義しているように、Aの時点を超えたBという時点において使われる。これらの違いは各語の基本語義から出ているのは明らかである。
(奥田 1998: 43)

奥田 (1998) の主張する3つの要因をまとめると以下の表5になる。

表5 **It is time** 構文の意味を決定する3つの要因 (奥田 1998)

	タイプ・形式・語	文全体の意味
要因① 補文のタイプ	to 不定詞	「時の到来」
	that 節	「緊急」
要因② that 節内の動詞	過去形	「緊急」
	原形	「…したほうがいい」 「時の到来」
	直説法	「時の到来」
要因③ time の直前に生起する語	now	「時の到来」
	just	
	about	「時の到来」 「緊急」
	high	「緊急」

なお、要因①「補文のタイプ」と要因③「**time** の直前に生起する語」の組み合わせについて奥田 (1998) は次のように述べている。補文が **to** 不定詞であり **time** の直前に語が生起している場合は、**to** 不定詞が意味する「時の到来」よりも **time** の直前に生起した語の意味が文全体の意味として優先されるという。補文が **that** 節であり **time** の直前に語が生起している場合は、節内の動詞が過去形であれば **that** 節が意味する「緊急」が文全体の意味として優先されという⁹。節内の動詞が過去形以外であれば、**time** の直前に生起した語の意味が文全体の意味として優先されるという。この考察についての問題点は以下の2.4.で指摘する。

⁹ ここでは奥田 (1998: 44) は「過去形」ではなく「仮定法」という用語を使っている。

2.4. 問題点

本節では、奥田 (1998) による *It is time* 構文の分析を概観した。奥田 (1998) は *It is time* 構文において補文の形式と文全体の意味が関連する可能性を指摘したという点で興味深い研究である。しかし、経験的な問題および概念的な問題があると思われる。

経験的な問題として、2.1. の表 3 の量的データの解釈について指摘することができる。例えば、奥田 (1998) は *JUST* 構文における *to* 不定詞と *that* 節の頻度はそれぞれ 92.9% と 7.1% である一方、*HIGH* 構文における *to* 不定詞と *that* 節の頻度はそれぞれ 30.0% と 70.0% であることから、*time* の直前に生起する語 (*just* および *high*) の意味と補文のタイプ (*to* 不定詞および *that* 節) との相関関係を示唆している。パーセントで見ると確かにそのように解釈もできそうだが、実際に収集したデータ数が適切であるかは疑問が残る。トークン数は、*JUST* 構文の場合は *to* 不定詞が 13 で *that* 節、*HIGH* 構文の場合は *to* 不定詞が 9 で *that* 節が 21 である。*TIME* 構文のトークン数は 1,518 であり、その他の構文のデータ数が極端に低いように思われる。

概念的な問題として、複数の要因が組み合わさったケースを挙げることができる。例えば、補文が *to* 不定詞であり *time* の直前に語が生起している場合は、*time* の直前に生起した語の意味が文全体の意味として優先されると奥田 (1998) は述べる。しかし、なぜそうなるのかについては説明されていない。

以上の問題点を念頭に置きながら *PAST* 構文に目を向けると、次のような疑問が生じる。上記表 2 で示したように、*PAST* 構文が *HIGH* 構文などと同じく *It is time* 構文の下位分類だとすると、奥田 (1998) の主張が *PAST* 構文にも該当することが予測される。4 節で後述するように、*time* の直前に生起する語の意味的特質から、*PAST* 構文は *HIGH* 構文などよりも意味的に強く緊急を表すと考えられる。だとすると、奥田 (1998) の要因①によると、*PAST* 構文で生起する補文は *that* 節が多いことが予測される。

そこで以下の 3 節では、*PAST* 構文の補文のタイプごとの頻度及び *that* 節内の動詞の形式の頻度を電子コーパスで調査する。4 節では、*TIME* 構文と *PAST* 構文についてのインフォーマント調査の結果を比較しながら *PAST* 構文の意味を考察する。

3. *PAST* 構文の形式的特徴

この節では、*PAST* 構文の形式的特徴を調査した結果を報告する。最初に、補文のタイプごとの頻度と *that* 節内の動詞の形式の頻度を提示する。次に、*PAST* 構文において *long* が *past* の直前に生起したケースにおける調査結果を提示する。電子コーパスは研究対象が多く見つかるということから電子コーパス *NOW* を使用した。検索式は *it [be] past time* とした。

3.1. 補文のタイプ及び *that* 節内の動詞の形式の頻度

表 6 は、*PAST* 構文の補文のタイプの頻度についての調査結果である。合計 915 例のうち、*to* 不定詞の頻度が高く、約 70% だった。*that* 節が生起する頻度は約 30% であり、上記 (3c) での英語母語話者の文法性判断とは異なり、*that* 節が非文法的であるとは言えないと思われる。

表 6 *PAST* 構文に生起した補文のタイプの頻度

構文	合計	<i>to</i> 不定詞	<i>that</i> 節
<i>PAST</i>	915	647 (70.7%)	268 (29.3%)

表 7 は、*PAST* 構文の補文の *that* 節内の動詞の形式の頻度についての調査結果である。動詞の形式のパターンは奥田 (1998) に準じて 7 つに分類し、原形、直説法、過去形、原形または直説法、原形または直説法または過去形 ([原・直・過])、助動詞 + 動詞の原形 ([助・原])、助動詞 + *have* + 過去分詞 ([助 + *have* + PP]) とした。それぞれの用例を (6a) から (6g) に示す (下線は筆者)。合計 268 例のうち、最も頻度が高いものは

過去形で、約 55% だった。

表 7 PAST 構文に生じた that 節内の動詞の形式の頻度

構文	合計	原形	直説法	過去形	原・直	原・直・過	助+原	助+have+PP
PAST	268	23 (8.6%)	21 (7.8%)	149 (55.6%)	66 (24.3%)	3 (1.5%)	4 (1.5%)	2 (0.7%)

- (6) a. Mayor Don Iveson believes it's past time the city retire existing parking meters.[原形] (NOW: 19-03-19 CA)
b. It is past time that El5 is made available for year-round sales.[直説法] (NOW: 18-10-09 US)
c. It is past time that good quality broadband was available ...¹⁰ [過去形] (NOW: 18-07-21 GB)
d. "It is past time that we tackle the plastic problem ..." [原・直] (NOW: 16-05-01 US)
e. It is past time China's self-selected leaders put some trust in the grassroots, ... [原・直・過] (NOW: 12-11-09 CA)
f. It is past time that all voters and candidates, ..., should be empowered to participate ... [助+原] (NOW: 17-09-23 CA)
g. It is past time, ..., that we ought to have started giving these issues the priority that they deserve.[助+have+PP] (NOW: 16-10-17 CA)

また、(6f) のような [助+原] の例は 4 つ見られ、それらの助動詞はすべて **should** だった。(6g) のような [助+have+PP] の 2 例については、助動詞は **should** と **ought to** だった¹¹。

in press

¹⁰ It is time 構文では、that 節内の動詞が **be** 動詞の場合は **were** ではなく **was** が使われることが Huddleston & Pullum (2002) や 鷹家・林 (2004) に指摘されている。インフォーマント (カナダ出身) は、(6c) で **be** 動詞が **were** の場合は容認不可能だと判断した。

¹¹ 匿名の査読者の方により、that 節内に **should** が生起することに着目するよう助言をいただいた。Leech (2011: 120) は以下の (i) のように、factual meaning, theoretical meaning, hypothetical meaning を対照している (下線は筆者)。

- (i) a. Factual
It's laughable that Septimus is in love ('Yes, it's a fact that he is in love').
b. Theoretical
It's laughable that Septimus should be in love ('Whether he is in love or not is a different matter').
c. Hypothetical
It would be laughable if Septimus were in love ('But actually, he's not in love').

that 節内の動詞が直説法である (ia) および if 節内の動詞が仮定法である (ic) とは異なり、that 節内に **should** が生起している (ib) では、「Septimus が恋をしている (実際にそうなのは別問題ではあるが) とは笑ってしまう」を意味するとされている。つまり、that 節の表す内容の真偽が非確定的であると話者が判断していると考えられる。この分析が It is time 構文にも適用されるとすると、It is time 構文に後続する that 節において **should** が生起した場合は、that 節が意味する内容が非確定的 (that 節内の動詞が表す行為が実際に行われたかどうかは非確定的) であると考えられるかもしれない。

that 節内に生起するその他の助動詞については、他のコーパスや書籍に目を向けると、**can** や **must** の例も見られる。

- (ii) a. It is past time that doctors and medical profession can "play God!" (COCA: NEWS 1997)
b. Surely it is past time that we must give as much thought to hauling our horses as we now do to crustaceans!
(S. E. Cregier, *The Psychology and Ethics of Humane Equine Treatment*)

表 6 と表 7 が示すように、PAST 構文には **to** 不定詞だけではなく that 節も後続し、さらに that 節の中では多様な形式、法、助動詞が見られることを考慮すると、奥田 (1998) の分析方法ではどのような説明になるか不明である。

以上が PAST 構文に関するコーパス調査の結果である。PAST 構文では補文として to 不定詞を従える傾向があるが、上記 (3c) についての英語母語話者の文法性判断とは異なり、that 節も生起可能であると言えよう。また、that 節内の動詞の形式は過去形が最も一般的であり、これは奥田 (1998) による It is time 構文の調査結果と並行する (2.2 節、表 4 を参照)。

3.2. PAST 構文に long が生起した場合

PAST 構文では、past の直前に生起し文全体の意味を強調すると考えられる語が見られることがある。電子コーパス NOW で検索した結果、そのような語の中で最も頻度が高いのは long であり、以下の (7) のような用例が見られる。

- (7) a. It is long past time for Americans to demand that they change it. (NOW: 19-01-19 US)
 b. It is long past time that a professional assessment was done of the structures and technical resources that remain. (NOW: 12-03-20 CA)

(7) が示すことは、PAST 構文に long が生起したとしても、補文として to 不定詞と that 節のどちらとも生起可能であるということである。では、頻度はどちらが高いだろうか。また、long の生起は that 節内の動詞の形式の頻度に影響を及ぼすのだろうか。その問いに答えるために、上記 3.1 節と同様のコーパス調査を行った。検索式は it [be] long past time とした。

表 8 は、long が生起した PAST 構文の補文のタイプの頻度についての調査結果である。合計 660 例のうち、to 不定詞の頻度が高く、約 70% だった。その数字は long の生起しない PAST 構文の場合と並行的である (3.1 の表 6 を参照)。

表 8 PAST 構文に long が生起した場合の補文のタイプの頻度

構文	合計	to 不定詞	that 節
PAST	660	453 (68.6%)	207 (31.4%)

表 9 は、long が生起した PAST 構文の補文の that 節内の動詞の形式についての調査結果である。最も頻度が高いものは過去形で、約 60% だった。その数字は long の生起しない PAST 構文の場合と並行的である (3.1 の表 7 を参照)。なお、long が生起した PAST 構文の補文の that 節内には現在完了の例が 1 つ見られた。

表 9 PAST 構文に long が生起した that 節内の動詞の形式

構文	合計	原形	直説法	過去形	原・直	原・直・過	助+原	助+have PP	現在完了
PAST	207	14 (6.8%)	24 (11.6%)	123 (59.4%)	38 (18.4%)	4 (1.9%)	2 (1.0)	1 (0.5%)	1 (0.5%)

以上が PAST 構文に long が生起した場合に関するコーパス調査の結果である。2 節で概観した奥田 (1998) の考えに従うと、long の生起により行為の実行の緊急性がさらに強調されれば形式的にも変化が生じるものと考えられそうである。つまり、PAST 構文に long が生起することによって、補文として that 節の頻度および that 節内の動詞として過去形の頻度が多くなることが予測される。しかし本調査の範囲内においては、表 6 と表 8 との比較および表 7 と表 9 との比較では、long の有無は PAST 構文の補文の選択や that 節内の動詞の形式に影響を与えないと思われる。

4. PAST 構文の意味的特徴と補文のタイプ

この節では、It is time 構文の下位分類の構文と比較しながら PAST 構文の意味的特徴を明らかにする。また、奥田 (1998) が主張するような補文のタイプと意味的特徴の関係が PAST 構文でも見られるかを検討する。

4.1. PAST 構文の強調的な意味

インフォーマントによると、ABOUT 構文や HIGH 構文と比較すると、PAST 構文は補文の表す行為の実行が求められていることが強調されるという¹³。このことは以下の (8) のパラフレーズが可能であるとする事実と符合する¹⁴。

- (8) a. It's about time I was leaving. = I have to leave quite soon.
 b. It's high time I was leaving. = I have to leave immediately.
 c. It's past time I was leaving. = I have to leave now. I'm late.

(8) に見られる PAST 構文の強調的な意味的特徴は、以下の (9) のような TIME 構文における it is past time の挿入的使用を可能にさせると考えられる (下線は筆者)。TIME 構文は行動の緊急度が相対的に低い一方で、PAST 構文は緊急度が非常に高く、その対比が PAST 構文の挿入的使用を可能にさせていると思われる。

- (9) a. It is time, it is past time, for Washington to start working for them! (NOW: 14-12-13 US)
 b. Now, it is time – in fact, it is past time – to move on.
 (J. Wilson, *Talking with the President: The Pragmatics of the Presidential Language*)
 c. It is time (in many ways, it is past time) for the philosophy of holding data on individual identity to be scrutinised in detail before it is too late. (W. Wall, *Genetics and DNA Technology: Legal Aspects*)
 d. "It is time and past time for you to transfer power responsibly and peacefully." (NOW: 12-02-07 US)

一方、以下の (10a-b) に見られるように、ABOUT 構文および HIGH 構文の挿入的使用は容認可能性が低下するとインフォーマント (カナダ出身) に判断された。この理由は PAST 構文に比べて、ABOUT 構文および HIGH 構文は緊急度が相対的に低いからだと思われる。

- (10) Now, it is time – in fact, it is {(a) *about / (b) ?high / (c) past} time – to update your resume.

以上のように、PAST 構文では補文が示す行為の緊急度が非常に高いことを意味することが明らかになった。

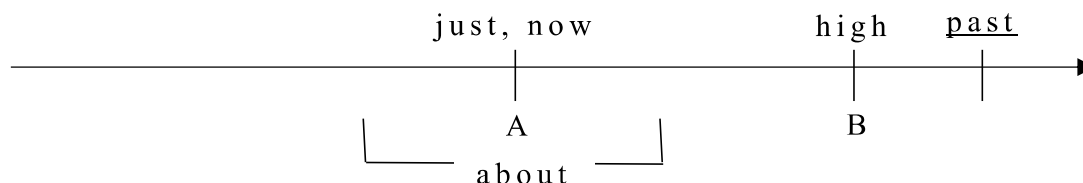
¹³ ここでの判断および (8) の作例とパラフレーズは柏野健次氏のご協力を得て、インフォーマント (オーストラリア出身) から提供されたデータである。感謝申し上げます。

¹⁴ 匿名の査読者の方から、1 人のインフォーマントからのデータのみに基づいて結論を出すのは早急ではないかとのご指摘をいただいた。本稿はインフォーマントの直観に依拠するだけではなく、電子コーパスも用いて実例を観察することにより、言語事実の観察を可能な限り正確に行おうとするものである。実際、(8) の直観に基づく意味の記述と (9) の言語現象は相互に関係するものと考えられる。なお、インフォーマント調査の問題点や限界については Sampson & Babarczy (2014: 81-84) および住吉 (2016: 46-52) に詳しい。

4.2. PAST 構文の補文のタイプと文の意味

次に、PAST 構文の補文のタイプと文の意味の関係について考察する。上記 2.3 節の図 1 は、It is time 構文に生起する修飾語の意味を時間軸上に示したものである。以下の図 2 は図 1 に **past** を追加したものである。PAST 構文の **past** はその意味的特徴から、補文の行為が行われるべき A の時点よりも右側に、さらに **high** よりも右側に位置すると考えられる。つまり、奥田 (1998) が述べるように「…するときにまさにやってきた」(「時の到来」) を意味する JUST 構文や NOW 構文とは異なり、PAST 構文は「そろそろ…する (すべき) ときだ」(「緊急」) を含意する ABOUT 構文や HIGH 構文よりもさらに緊急度が非常に高いものと考えられる。

図 2 time の直前に生起する語の意味と文の意味との関係 (奥田 1998 に基づき加筆)



もしそうだとすると、PAST 構文に生起する補文は ABOUT 構文や HIGH 構文と同様に **that** 節が多くなることが奥田 (1998) では予測されると思われる。奥田 (1998) によると、ABOUT 構文および HIGH 構文には **that** 節が後続したのは、それぞれ 77.4% および 70.0% だった (2.1 節、表 3 参照)。しかし、PAST 構文に関する本稿の調査によると **to** 不定詞の頻度が高く、70.7% だった (3.1 節、表 3 参照)。

これが示唆する一つの可能性は、奥田 (1998) の主張とは異なり、It is time 構文の補文の形式と文全体の意味との関連性は弱い、または存在しないということである。実際、以下の (11) のペアの意味は全く同一だと判断するインフォーマント (カナダ出身) も存在する。

- (11) a. It is time for you to be in bed.
b. It is time that you were in bed.

2.3 節で概観したように It is time 構文は補文のタイプによって文全体の意味が異なるとする先行研究がある。その一方、(11) の意味が同一であると述べるインフォーマントも存在する。このことから、It is time 構文の補文のタイプと文全体の意味との関係を改めて調査する意義があると考えられる。以下では、この問題についてのオンラインでのインフォーマント調査の結果について報告する。

4.3. インフォーマント調査

It is time 構文の補文のタイプと意味との関係を明らかにするために、It is time 構文の下位分類として最も頻度の高い (2.1. の表 3 を参照) TIME 構文および本稿の研究対象である PAST 構文についてオンラインでのインフォーマント調査を行った。

TIME 構文についてのインフォーマント調査は、2019 年 11 月から 12 月の間に以下の手順で行った。言語学関係のウェブサイトである The LINGUIST List (<https://linguistlist.org/>) のメーリングリストに Google フォームを使用した本調査の掲載を依頼した。これにより、言語に関心のあるメーリングリスト受信者が本調査にインフォーマントとして参加することが可能となった。参加者は合計 25 人 (アメリカ人 19 人、イギリス人 5 人、カナダ人 1 人) だった。参加者の職業は言語学者 13 人 (退職者 3 人含む)、言語学専攻の大学院生 7 人、教員 3 人 (うち退職者 2 人含む)、高等教育機関の管理職 1 人、コピーエディター 1 人だった。本調査には以下の (12) と (13) の 2 つの文と、文の意味を示す選択肢 A から C を組み込んだ。また、任意でコメントを入力する欄も設けた。

(12) We've enjoyed the evening, but it's time for us to go.

- A. The time has now arrived for us to go.
- B. We should probably have left before this.
- C. Others

(13) We've enjoyed the evening, but it's time we went.

- A. The time has now arrived for us to go.
- B. We should probably have left before this.
- C. Others

結果は表 10 が示す通りである。

表 10 it's time for us to go/we went. についての調査結果

	(12) it's time for us to go.	(13) it's time we went.
A. The time has now arrived for us to go.	23 (92.0%)	21 (84.0%)
B. We should probably have left before this.	0 (0%)	1 (4%)
C. Others	2 (8%) ・ We should probably have already left. ・ Neither.	3 (12%) ・ We're running late. ・ We should probably have already left. ・ Neither.

この調査では、TIME 構文に生起する補文が to 不定詞または that 節であったとしても、意味は両者ともに「時の到来」を表すと判断するインフォーマントが多数である結果が得られた。つまり、TIME 構文では補文のタイプによって文全体の意味に差があるとは言えないと考えられる。

PAST 構文についてのインフォーマント調査は、2025 年 2 月から 3 月の間に以下の手順で行った。信頼のおける英語母語話者に個人的に依頼するとともに、SNS の Facebook に存在する “English Korean Japanese Language Q&A” というグループに Google フォームを使用した本調査を投稿した¹⁵。これにより、英語を含めた言語に関心のあるメンバーが本調査にインフォーマントとして参加することが可能となった。参加者は合計 9 人（アメリカ人 5 人、イギリス人 3 人）だった。参加者の職業は、翻訳家 1 人、教授（専門はライティング）1 人、アマチュアの言語学者 1 人、学生（専門はライティング）1 人、エンジニア（言語教育の修士号取得済み）1 人、事務官 1 人、国際コーディネーター 1 人、米国国防外国訪問担当官 1 人、栄養士（退職者）1 人だった。本調査には以下の (14) と (15) の 2 つの文と、文の意味を示す選択肢 A から C を組み込んだ。また、任意でコメントを入力する欄も設けた。

¹⁵ <https://www.facebook.com/groups/1078416327158554>

(14) We've enjoyed the evening, but it's past time for us to go.

A.The time has now arrived for us to go.

B.We should probably have left before this.

C.Others

(15) We've enjoyed the evening, but it's past time we went.

A.The time has now arrived for us to go.

B.We should probably have left before this.

C.Others

結果は表 11 が示す通りである。

表 11 it's past time for us to go/we went. についての調査結果

	(14) it's past time for us to go.	(15) it's past time we went.
A.The time has now arrived for us to go.	0 (0%)	1 (11.1%)
B.We should probably have left before this.	8 (88.9%)	7 (77.8%)
C.Others	1 (11.1%) ・ We should get going now.	1 (11.1%) ・ We should have gone before this.

この調査では、PAST 構文に生起する補文が **to** 不定詞または **that** 節であったとしても、意味は両者ともに「緊急」を表すと判断するインフォーマントが多数である結果が得られた。つまり、PAST 構文では補文のタイプによって文全体の意味に差があるとは言えないと考えられる¹⁶。

以上の2つのインフォーマント調査の結果が妥当であるとする、PAST 構文および **It is time** 構文全般について以下の可能性が示唆される。TIME 構文と PAST 構文の形式的な差は **time** の直前に生起する語の有無である。**time** の直前に語が生起しない TIME 構文では補文のタイプに関わらず文全体の意味は「時の到来」であり、**time** の直前に **past** が生起する PAST 構文では補文のタイプに関わらず文全体の意味は「緊急」である。とすると、PAST 構文や TIME 構文などの下位分類だけではなく、**It is time** 構文全般において次の一般化ができるかもしれない。つまり、**It is time** 構文において文の意味が「時の到来」または「緊急」を表すのは **time** の直前に生起する語の意味に深く関係しているためであると考えられる。言い換えると、**It is time** 構文において文の意味が「時の到来」または「緊急」を表すのは補文が **to** 不定詞または **that** 節であることとは関連しないと考えられる¹⁷。

¹⁶ (14) および (15) で選択肢 C. を選択し自由記述をしたのは同一のインフォーマントである。この自由記述 (**to** 不定詞が生起する (13) では “We should get going now” と記述、**that** 節が生起する (14) では “We should have gone before this” と記述) は 奥田 (1998) の述べる「時の到来」と「緊急」と一致していると思われる。なお、当該インフォーマントはイギリス英語話者である。注 7 を参照。

5. 結論

本稿では、It is time 構文の形式と意味には関連があるとする先行研究を概観し、同様のことが PAST 構文でも該当するかに関して電子コーパスを使用して調査した。PAST 構文は補文として to 不定詞を従える傾向にあること、および補文の that 節内の動詞の形式は過去形が一般的であることを観察した。また、PAST 構文の意味的特徴について観察し、他の It is time 構文と比較すると、PAST 構文は強調的な意味があることを観察した。以上の PAST 構文の形式 (to 不定詞の選好) および意味 (強い緊急性) を考察すると、PAST 構文は先行研究の予測とは異なると考えられることを指摘した。

最後に、to 不定詞と that 節の選択および文の意味において、It is time 構文と類似する構文のふるまいについて指摘したい。形容詞 important, necessary, vital などが叙述的に使われる場合、文の主語として it が生起し、補文として to 不定詞および that 節が生起する¹⁸。

(16) It is important for doctors to know what patients need.

≡ It is important that doctors ((主に英) should) know what patients need. (W⁴, s.v. important)

(16) の意味は「患者が何を求めているかを医者がわきまえていることが大事だ」であり、補文が表す動作の必要性を示すという点で It is time 構文に類似していると考えられる。また、(16) は補文として to 不定詞も that 節も両方生起可能であるという点も It is time 構文に類似している。(16) が示すように、両タイプの補文において文全体の意味が同じだとすると、本稿の PAST 構文の分析結果と並行することとなる。さらに、電子コーパス NOW を使用し、It is important に to 不定詞が生起する頻度 (検索式: it [be] important to VERB) と that 節が生起する頻度 (検索式: it [be] important that) を計測すると、表 12 の結果が得られた。

表 12 It is important … に生起した補文のタイプの頻度

構文	合計	to 不定詞	that 節
It is important	574,245	432,582 (75.3%)	141,663 (24.7%)

to 不定詞の頻度が約 70% であり、この結果も PAST 構文と並行する (3.1 節、表 6 を参照)。

以上の指摘が妥当だとすると、PAST 構文において、または It is time 構文全般において、to 不定詞が that 節よりも選好されるのは、to 不定詞および that 節が生起する構文全般に見られる、より一般的な傾向なのか

¹⁷ 匿名の査読者の方から、類像性 (iconicity) の観点からの考察が望まれると指摘をいただいた。濱田 (2019: 168-171) は、類像性とは「言語表現の距離は認識的な距離と平行するという原理」と述べ、以下の例を挙げている。

- (i) a. Bill ordered Jim to submit the document no later than December 6, 2019.
b. Bill ordered that Jim should submit the document no later than December 6, 2019.
ビルはジムに 2019 年 12 月 6 日までに書類を提出するよう命じた

(ia) は Bill が Jim に直接命令したことを表し、(ib) は Bill が Jim に第 3 者を通して命令したことを表しているという。つまり Bill と Jim の距離が (ia) では ordered の 1 語に介在され、(ib) は ordered that の 2 語に介在されているという点で、(ia) と (ib) には認識的な距離が反映されていると考えられる。

しかし、今回のインフォーマント調査では、to 不定詞と that 節では意味の違いは見られなかった。このことについては今後の課題とし、改めて考察を深めたい。なお、英語の補文と類像性との関係について言及している研究として以下のものを挙げることができる。動詞 help の不定詞補文のタイプ (to 不定詞と裸不定詞) と主語による help という動作の直接性との関係については Mair (1995: 262) を、動詞 find の補文構造 (O + C, O + to be + C, that 節) と主語による find という動作の直接性との関係については友澤 (2018: 23) を参照。また、コーパスで得られるデータに見られる動作の直接性・間接性については Callies (2013: 242) を参照。

¹⁸ 匿名の査読者の方から以下のコメントをいただいた。(16) で見られるように≡などで示される 2 つの文の関係には注意が必要であるという指摘である。W⁴によると、≡は書き換えの関係にあることを示すという。本稿のここでのポイントは、It is important は to 不定詞および that 節に後続されることが可能であり、それは It is time 構文と並行するということを示すことだけを意図している。前提や談話環境と補文タイプとの関係などは本稿の対象外である

もしれない。その場合、補文の選択が文全体の意味にどれほど関与するのかが興味深い問題である。今後の課題としたい¹⁹。

参考文献

- Alexander, L. 1988. *Longman English Grammar*. London: Longman.
- 安藤貞雄. 2005.『現代英文法講義』東京：開拓社.
- Callies, M. 2013. Bare infinitival complements in present-day English. In B. Aarts, J. Close, G. Leech & S. Wallis (eds.), *The English Verb Phrase: Corpus Methodology and Current Change*. 239-255. Cambridge: Cambridge University Press. 239-255.
- Davies, M. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 560 million words, 1990-present*. Available online at <https://corpus.byu.edu/coca/>. (COCA)
- Davies, M. 2013. *Corpus of News on the Web (NOW): 3+ billion words from 20 countries, updated every day*. Available online at <https://corpus.byu.edu/now/>. (NOW)
- Declerk, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- 江川泰一郎. 1991.『英文法解説』(改訂3版)東京：金子書房.
- 深谷輝彦. 2000.「『時間ですよ』の英文法」『英語教育』第49巻第2号, 31-33.
- 濱田英人. 2019.『脳のしくみが解れば英語がみえる』東京：開拓社.
- 原川博善. 2016.「It's time … に続く節の現在形」『英語教育』第65巻第5号, 76-77.
- Huddleston, R. & G. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦. 2006.『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』東京：日本放送出版協会.
- 石橋幸太郎(編). 1966.『英語語法大事典』東京：大修館書店.
- 柏野健次. 2010.『英語語法レファレンス』東京：三省堂.
- 久保田正人. 2008.「英語学点描」『言語文化論叢』第2号. 千葉大学言語教育センター.
- Leech, G. 2011. *Meaning and the English Verb* (3rd ed.). Tokyo: Hituzi Shobo.
- Mair, Christian. 1995. Changing patterns of complementation, and concomitant grammaticalisation, of the verb help in present-day English. In B. Aarts & C. Meyer (eds.), *The Verb in Contemporary English: Theory and Description*. 258-272. Cambridge: Cambridge University Press.

¹⁹ 匿名の査読者の方から以下のコメントをいただいた。It is time 構文の解明には、この構文における it が何であるかを明らかにすることが不可欠であるという指摘である。それにより、It is time 構文に後続する to 不定詞の頻度の高さ、および後続する that 節内の動詞の過去形についてより明らかになるだろうと助言をいただいた。

It is time 構文の it についての詳細な調査は今後の課題としたいが、江川(1991: 47)では「時間の it」とされている。

(i) It's time to knock off for tea.

また、COCA コーパスでは以下の実例が見られる(下線は筆者)。

(ii) The story was finished just before eleven. He stacked the pages neatly, put the script into the file, and cleaned the ink out of the pen in the Mark VIII; it always clogged if he left it to dry. Then it was eleven and time to see Martin. (COCA: FIC 1993)

(ii) の最終文において、It is time 構文の time と 時間を表す eleven が等位接続詞 and によって接続されている。つまり、この文に関しては It is time 構文の it は時間を表す it であると考えられる。仮に It is time 構文における全ての it が時間を表すとなると、時間を表す it は安藤(2005: 433)では「環境の it (ambient 'it')」に分類されている。

以上を前提に、匿名の査読者の方は以下のような研究の方向性を提案された。It is time 構文が to 不定詞との共起頻度が高いのは to 不定詞の to の語源(方向を表す前置詞)と関係する可能性がある点、および It is time 構文に後続する that 節内における動詞が過去形である頻度が高いことと現在の状況との「距離の遠さ」とが関係する可能性がある点である。今後の研究の参考にしたい。

- 松本安弘・松本アイリン. 1976.『あなたの英語診断辞書』東京：北星堂書店.
- 明日誠一. 2017.「独立句として現れる *far from it* の語法」『英語語法文法学会』第 24 号, 103-119.
- 奥田隆一. 1998.「*It's time* … という表現について」小西先生傘寿記念論文集編集委員会 (編)『現代英語の語法と文法：小西友七先生傘寿記念論文集』東京：大修館書店, 39-46.
- 奥田隆一. 2013.『英語語法学をめざして』吹田：関西大学出版部.
- 大竹芳夫. 1999.「現在時指示と発話行為：*It is time* 構文と *Now is the time* 構文の意味と機能を中心にして」『信州大学教育学部紀要』第 97 号, 19-30.
- Sampson, G. & A. Babarczy. 2014. *Grammar without Grammaticality: Growth and Limits of Grammatical Precision*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Swan, M. 2016. *Practical English Usage* (4th edition). Oxford: Oxford University Press.
- 鷹家秀史・林龍次郎. 2004.『詳説レクシスプラネットボード』東京：旺文社.
- 寺山里穂. 2024.「*it is time* 関連表現と補文形式に関する一考察」『英語語法文法学会第 32 回大会 予稿集』, 1-4.
- 友澤宏隆. 2018.「*find + that* 節構文の認知的分析」『言語文化』54: 21-31.
- 住吉誠. 2016.『規範からの解放』東京：研究社.
- Thomson, A. J. & A. V. Martinet. 1986. *A Practical English Grammar* (4th edition). Oxford: Oxford University Press.
- 内田聖二 (編). 2009.『英語談話表現辞典』東京：三省堂.
- 渡辺登士 (編). 1976.『続・英語語法大事典』東京：大修館書店.
- 渡辺登士 (編). 1983.『英語語法事典・第 3 集』東京：大修館書店.
- 渡辺登士 (編). 1995.『英語語法大事典・第 4 集』東京：大修館書店.
- 八木克正. 1996.『ネイティブの直観にせまる語法研究—現代英語への記述的アプローチ』東京：研究社.
- 八木克正. 2021.『現代高等英文法：学習文法から科学文法へ』東京：開拓社.

辞書

『ウィズダム英和辞典』第 4 版 (W⁴)

『ジーニアス英和辞典』第 6 版 (G⁶)

Do the Complement Types of *It is past time* ... Correlate with Sentence Meaning?

Yasutomo Kuwana *

Abstract

This paper discusses the PAST construction, a subtype of the so-called *It is time* construction (e.g., It's time for me to leave). In this construction, a word such as *high* may appear directly in front of *time*. Furthermore, two types of complement clauses can occur: a *to*-infinitive and a *that*-clause. Although a number of previous studies have examined the *It is time* construction, sentences in which the word *past* appears directly in front of *time*, or the PAST construction, have not been investigated. Okuda (1998) argued that the choice of the complement types in the *It is time* construction correlates with the overall meaning of the sentence as well as with the meaning of the word in front of *time*. If such a relationship exists, a natural question arises whether a similar relationship between complement clause selection and sentence meaning is also found in the PAST construction. This paper aims to answer that question through a corpus survey and an informant survey. The findings suggest that, in the PAST construction, no relationship exists between the choice of complement clause and sentence meaning. It is also argued that the overall meaning of the sentence can be attributed to the meaning of the word in front of *time*.

Key words

It is time construction, *to*-infinitive, *that*-clause, corpus survey, informant survey

* English Division, General Education, Asahikawa Medical University